



・日本の音階・・・主に5音階であること

ドレミソラ C D E G A(=呂旋法、ヨナ抜き長音階)

ドレファソシ♭ C D F G B♭(=律旋法)

ドミ♭ファソシ♭ C E♭ F G B♭(=民謡音階、陽旋法、ニ口抜き短音階)

ドレ♭ファソシ♭ C D♭ F G B♭(=陰旋法、都節音階)

ドミファソシ C E F G B(=琉球音階、ニ口抜き長音階)

ドレミ♭ソラ♭ C D E ♭G A♭(=ヨナ抜き短音階)

ドレミ♭ソラ C D E♭ G A(=雲井音階)

ドレ♭ファファ#シ♭ C D♭ F F# B♭(=岩戸音階)

・民謡を例に

民謡音階・・・ドミ♭ファソシ♭ド' /九州南部は少ない、呂と律が多い←最上川舟唄(山形)

都節音階・・・ドレ♭ファソラド'または呂陰音階ドレミ♭ソラ♭ド'←律音階系←もみすり唄(山形)

律音階・・・ドレファソラド'(またはドレファソシ♭ド) /田植え唄に多い(特に広島)←刈干切歌(宮崎)

呂音階・・・ドレミソラド'

呂陰音階・・・ドレミ♭ソラ♭ド'←黒田節(福岡)

琉球音階・・・ドミファソシド' /14世紀三線伝来とともに←砂持節(沖縄)

西物/律が多い、東日本・日本海/民謡多い

■都節音階の発生に関して

古来、日本人の感覚として都節的指向があった?

陰陽五行思想-->平調=亡国の音

呂曲=「耳を悦ばず」、律曲=「哀温を合せ、心を歡ばず」<--「声明源流記」

哀音=歌謡の様相、旋律の下行性

■仏教音楽と世俗音楽の関係

・参考・・・哀音考←『仏教音楽論集 華頂山松籟攻』(中西和夫、1998、東方出版)

「破戒の沙門等を道場に結び、偏(ひとえ)に今案を以て、伴って仏号を唱うると為し、妄りに邪音を作して、放逸の人心を蕩かす、見聞満座の処、賢善の形を現すと雖も、寂賽破窓の夕、流俗之睡に異らず」--建保7年(1219)2月8日 専修念仏禁止の院宣

「音の哀楽を以て、国の盛衰を知る。詩の序に曰く、治世の音は安くして以て樂し、其の政、和せばなり。乱世の音は怨を以て忿(い)かる、其の政乖(そむ)けばなり。亡国の音は哀しみて、以て思う、其の民困ればなり云云。而して、近来念仏の音を聞くに、現世濟民(さいみん)の音に背き、己に哀慟の響を成す。是、亡国の音というべし」---貞応3年(1224)5月17日付 延暦寺奏状

「凡その僧尼懺座し、妄(みだり)に哀音を愛で、但俗中の耳を厭うに非ず。抑ね亦真際の趣に乖く。如して改め正さ(ず)ば、何か法門と囁かん。弘仁の聖代、格条眼在りて、宜しく五畿七道に課し、興行の道を停廢し、違犯の身を捉搦すべし」--嘉禄3年(1228)7月17日 専修念仏停止宣旨

「声明の曲の改まりし初めを尋ねれば、蓮入房といひし人、委(くわ)しく良忍上人の口伝をうけざりし流にて、たゞ博士に任せて大原の声明を興行せしよりして、上人の妙曲を失えなへり、その子細今の歌の如く、博士にまかせ、声にまかせて思ふさまに曲をなすによりて、呂の曲は律になり、律の曲は呂になりて、陰陽たがい侍(はべ)りしほどに、専修念仏の曲流布して、男女是にこそりしかば、人皆声明のきゝをおし侍りけるに、嫡々相承の妙曲を改めし故なるべし、それよりして今に至るまで、専修念仏の曲さかりなれば、正道の仏事を行ふ人まれなり、度々かみつた(上方)に修せらるゝも、顕密の僧をめされて、音律の道を尋ねられざれば思い思ひの声々みだりがわしく、その感を催すことなければ、またこれを賞せられず、賞なければまたこれを学せざるによりて、この道はやがてすたれ侍り、かの念仏は後鳥羽院の御代の末つかに、住蓮安楽などいひし、その長として広め侍り、これ亡国の声なるが故に、承久の御乱出(おんみだれい)きて、王法衰へたりとは、古老の人は申侍し」

---『日本歌学体系』第四巻86頁